

晴天日放課後(2013年秋・2016年)の集団規模と使われ方の関係

- 規模計画の観点から見た2室3領域型学童保育施設つばめの家の使われ方その1 -

学童保育施設	納屋	改修
集団規模	使われ方	空間機能評価

正会員	○神崎翔太郎*
正会員	中村京平**
正会員	三島幸子***
正会員	中園真人****

## 1. 序論

### 1) 研究背景

1997年制定の児童福祉法により放課後児童保育が制度化され、2007年に従来の学童保育に加え、就学全児童を対象とした「放課後子ども教室推進事業」が創設された。2014年の児童福祉法改正により、2015年4月から学童保育施設の対象児童年齢が6年生まで引き上げられるとともに、施設定員や1人当り専用区画面積が従来のガイドラインの推奨値から設置基準として明確に示され、施設定員40名以下、1人当り専用区域面積1.65㎡以上の水準が目指されることとなった。しかし、既存施設の新たな設置基準に準拠した運営への迅速な移行は難しく、今後の拡充の方向としては、既存施設の有効活用と管理運営の観点から小学校の余裕教室等の利用が増加するものと推測されるが、これに加え民間を含めた小学校以外の既存施設の活用や民間組織による地域に密着した運営の促進が、施設整備をさらに促進する上で重要な課題として位置付けられる。

### 2) 既往研究と研究目的

既往研究には学童保育施設を含む児童の居場所確保の重要性を指摘した研究<sup>1)</sup>を始め、使われ方調査をもとに保育施設の空間構成のあり方を論じた研究成果<sup>2,3)</sup>があり、2室3領域型のモデルプランも提案されている。最近では保育空間の分割方法と効果を検討した研究<sup>4)</sup>や学童保育と放課後子供教室の一体的運用のあり方を論じた研究<sup>5)</sup>等、今日的課題への展開が見られる。一方民間施設を活用した学童保育に関しては、民家型施設の平面構成を整理した報告<sup>6)</sup>、マンション設置型保育所・学童クラブの整備状況報告<sup>7)</sup>等があるが全体的には研究蓄積は少ない。関連して筆者らは既報<sup>8)</sup>で、施設定員25人である2室3領域型の空間構成の本施設における平日放課後の集団規模と使われ方の関係に関して、施設定員平均10人・15人・20人を比較し、有用性の有無を示した。

本論では、集団規模が異なる20人・24~25人・28人の3つの調査事例に関し、集団規模の違いにより生じる事象、さらに施設定員25人を上回ることで起こりうる課題について平日放課後の使われ方において検討し、本施設における施設定員について考察を加える。

## 2. 対象施設と調査概要

### 1) 対象施設

下関市菊川町に位置する、地域共生ホーム「中村さん家」の納屋が改修された建築物に「つばめの家」は設置されている(図1)。既存の納屋2室と家畜小屋を多目的室・プレイルーム・畳コーナー及びトイレ・シャワー室としたコン

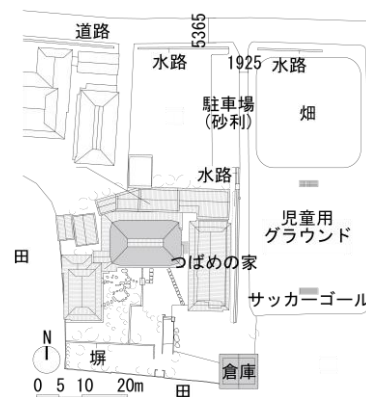


図1 施設配置図



写真1 多目的室



写真2 プレイルーム

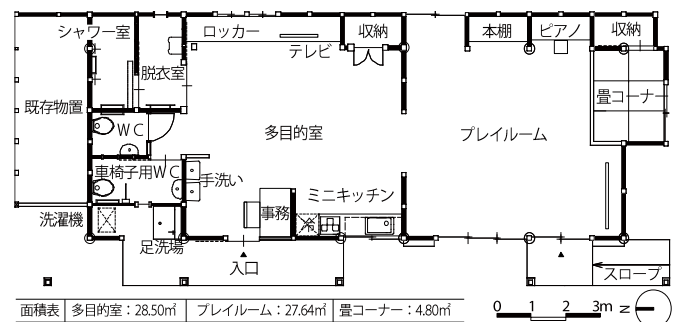


図2 施設平面図

パクトな2室3領域の空間構成であり(図2, 写真1,2)、手洗い・キッチン・収納を除いた有効面積は60.9㎡(多目的室:28.5㎡、プレイルーム:27.6㎡、畳コーナー:4.8㎡)で、児童定員は25人(2.4㎡/人)である。

### 2) 調査概要と晴天日放課後の基本生活プログラム

調査期間は2013.10.28-11.15の内10日、2016.06.06-2016.07.12の内20日間である。施設利用児童と職員を対象とし、施設の開錠から施錠まで10分間隔で平面図に行きの場と内容を記録した。併せて多目的室とプレイルームにビデオカメラを各1台設置し、1日の生活場面を全期間撮影するとともに、適宜写真撮影を行い、使われ方調査を行った。

本稿では、各期の調査日から平均来所人数20人である2013年秋、施設定員を上回る28人が来所した2016年の調査期間内より24~25・28人の2つの集団規模を抽出し、その典型的な場面を図面で示し、考察を加える。

晴天日放課後の基本プログラムは、15:00過ぎに学校から徒歩で来所する。来所した児童からおやつを食べて、勉強を開始する。15:50頃になると勉強を終えた児童が現れ始め、勉強を終えた児童から自由遊びに移行する。

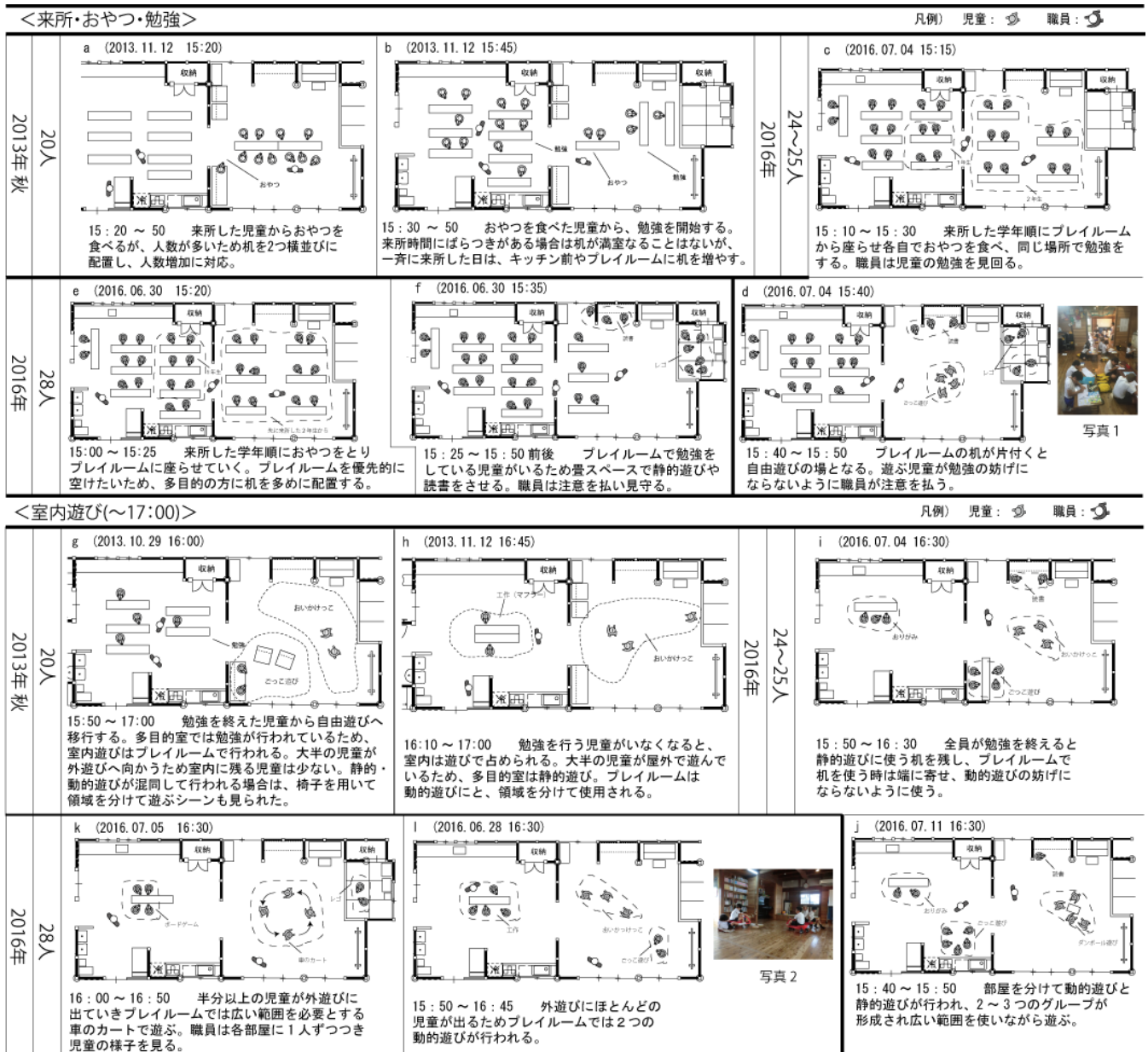


図3 2013年秋・2016年放課後使われ方の典型場面(その1)

児童は室内・屋外で遊び、晴天日は特に屋外で遊ぶ。17:00になると屋外遊びが制限され、児童は室内で静的遊びを行い保護者の迎えを待つ。保護者は17:00以降に迎えにやってくるのが大半で、児童が全員帰宅するのは、18:00前後となる。児童が全員帰宅すると、施設を施錠し閉所となる。

### 3. 生活プログラムと典型事例

図3,4には各期間中の典型事例の図面を示したものであり、生活プログラムの展開に沿って使われ方の詳細を考察していく。児童はそれぞれの下校時間により来所時間が異なるが、2013・2016年両方で早い児童は15:00頃には来所する。来所後のプログラムとしては、おやつ・勉強が行われる。2013年は、人数に余裕があるため、おやつをプレイルームに机を2つ並べ、来所した児童から机を囲むようにおやつを食べる(図3-a)。おやつを食べた

児童から多目的室で勉強を開始する。一斉に来所する際は多目的室のみでは収まらないため、プレイルーム等にも机を増やし対応する(図3-b)。2016年は、人数が増加したため常に2部屋を利用し行われるようになり、来所時間にばらつきがあるため、勉強の終了時間にも差が生じる。そのため、早く終える児童の遊ぶ空間を確保するために畳コーナーを含む2領域があるプレイルームから児童を座らせる。24~25人ではプレイルームに5つ机を設置し、来所した学年毎にプレイルームから座らせ、おやつを各自の机で食べた後に同じ机で勉強を始める(図3-c)。勉強を終えた児童から自由遊びになり、プレイルームがまだ空いていない場合は、畳コーナーで静的遊びを行い、プレイルームで勉強をする児童がいなくなると机が片付けられ、完全に動的遊びの場として開放し職員の見守りのもと、遊びが行われる(図3-d,写真3-1)。施設

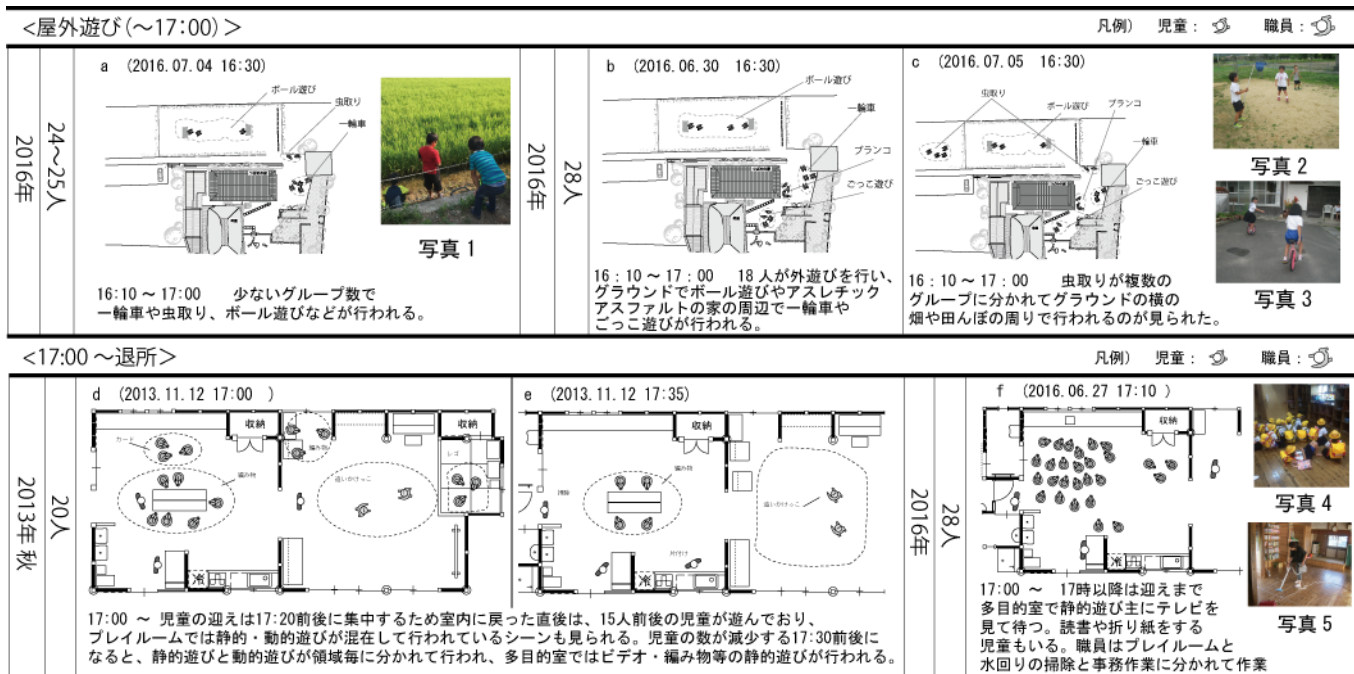


図4 2013年秋・2016年放課後使われ方の典型場面(その2)

定員を上回る28人が来所する場合は、多目的室に多めに机の数を増加させ、同様にプレイルームから順に座らせる(図3-e)。プレイルームの机は次第に片付けるが、プレイルーム全体が終わらない限りは、勉強する児童の妨げにならないように畳コーナーでの静的遊びや読書に限られ、職員の見守りのもと行われる(図3-f)。このように人数の増加に対して、その後のプログラムのための逃げ場を作り、児童のプログラム間の移動を円滑に進めるための工夫や学年毎にすることで複数人に同指導を行う合理化、2室3領域の空間構成をうまく利用した領域区分を行う場面が見られる。

勉強後は自由遊びが行われる。2013年は16:00頃ではまだ勉強が行われており、プレイルームのみで遊びが行われる。大半の児童が外遊びへ向かうため室内に残る児童は少なく、プレイルームではごっこ遊びやおいかげっこなど広い空間を有する遊びが行われる。またプレイルームで静的・動的遊びが混同して行われる場合は、椅子を用いて領域を分けて遊ぶ場面が見られた(図3-g)。16:20頃になると勉強を行う児童がいなくなり、多目的室で静的遊び、プレイルームで動的遊びと領域を分けて遊ぶ(図3-h)。2016年も同様に大半の児童が外遊びを行う。プレイルームで机を利用して遊びを行う際には端に寄せ使うように指導しプレイルームを動的遊びの場として妨げにならないようにし、プレイルームでは段ボールを使った遊びなど行われる(図3-I, j)。28名来所する際にも同様に、多目的室・プレイルームで静的・動的遊びと領域を分けて行われる。プレイルームでは最も広い範囲を必要とする車のカートを使った遊びや追いかげっこが行われ、安全のためまた、カートの取り合いの喧嘩を防ぐために職員が1名見守りながら動的遊びが進行し、多目的室では職員に

作り方を習いながら工作を行ったり、畳コーナーでレゴで遊んだりする児童の様子も見られる(図3-k, l、写真3-2)。晴天日に行われる自由遊びでは、大半の児童が外遊びを行うため室内に残る児童は多くない。さらに、室内では多目的室・プレイルームで領域を分けて遊びを行うため、十分な空間を利用することができ、人数増加による影響を受けることは見られない。

屋外遊びでは、主にグラウンド・つばめの家南側スペース・母屋玄関前広場・庭の4つの場所が挙げられ、グラウンドではボール遊びが、家南側スペースでは簡易ボール遊び、玄関前では縄跳び等の道具を使った遊び、庭では土遊びや虫取りというように行われる遊びの種類に応じて、外構空間における緩やかな領域分けが存在している。また、職員はグラウンド・庭・家南側スペースと玄関前の間に分かれ児童の安全を確保するように見守る。2016年の24～25人では、グラウンドでボール遊び、庭や田んぼ付近での虫取り、一輪車等の少数のグループ数で遊びが行われており、平均して2、3のグループ数で行われていた。さらに、遊びの種類をあまり変えることなく一つの遊びを長く継続していた(図4-a、写真4-1)。2016年の28人では、24～25人に比べ屋外で遊ぶ児童の数も増え、28人の内18人が外遊びを行い、玄関前や家南側スペースでのごっこ遊びやブランコ、一輪車や竹馬等多くの遊びが行われており、同空間で行われている児童の遊びにつられ遊びの種類を変える児童が多く見られた。またグラウンドでは既存のサッカーゴールを使いボール遊びや、アスレックスで遊ぶ場面も見られた(図4-b)。また、虫取りを行うグループが複数現れ、人数の増加の影響により、屋外遊びでのグループ数の増加が起り、多い時は6、7のグループ数が存在した(図4-c、写真4-2, 3)。人数の



増加により屋外遊びにおいては、グループ形成の仕方に影響が生じており、少数の人数で多くのグループ数が形成されており、遊びの種類においても、種目を変え、多く行われることが確認された。

17:00になると、児童は室内に戻り、保護者の迎えを待つ時間となる。2013年では、17:00以降であっても児童は自由に遊びを行い、基本的には多目的室・プレイルームで静的・動的遊びと区別して遊びが行われる。17:20前後に迎えが集中するため、17:00頃では、多目的室でトランプや編み物、プレイルームでは追いかっこやごっこ遊び、畳コーナーでレゴ等それぞれの児童が複数のグループで思い思いの遊びを行う(図4-d)。17:35頃になると、グループ数も少なくなり、職員は水回りの掃除や片付け、事務作業などを並行して行う(図4-e)。18:00前には全児童が帰宅し、職員は施設を施錠し帰宅し、その日の終日保育は終了する。2016年では、人数の増加による退所時の混雑をなくし、職員の負担を減少させるために児童は多目的室での静的遊び、主にビデオを見て迎えを待つという方針が変わった。17:00を過ぎると、児童は自分の荷物を取り多目的室に座り、主にビデオを見たり、読書をしたりして迎えを待つ。

その間に職員は、事務作業をしながら迎えの対応・水回りの掃除・プレイルームの掃除機がけや片付けと役割を分け、円滑に作業を進める(図4-f、写真4-4,5)。18:00頃になると全児童が帰宅する。その後、職員は施設を施錠し帰宅し、その日の終日保育は終了する。17:00以降に関しては、混雑防止や職員の作業を並行して行うための合理化が図られており、人数の増加の影響が特に現れていると考えられる。

#### 4. まとめ

以上より2013年秋20人・2016年24~25人・28人の使われ方における典型的なシーンを抽出しまとめた。

集団規模の違いにより生じる変化が、顕著に見られるのは勉強時間と17:00以降児童が屋外遊びから室内に戻ってきた際である。勉強時には、児童が個人個人でおやつ・勉強という流れを行うことや、職員が勉強後の児童の逃げの場の確保を考慮したうえでプレイルームから優先に座らせるなど、プログラムを円滑に進行するための工夫に加え、職員の仕事の合理化も図った場面が見られた。充実した屋外空間を保有しているため、自由遊びの時間に関しては、屋外遊びに向かう児童が多いことにより、室内での遊びには人数増加の影響は見られず、領域分けもうまく利用できている。屋外遊びでは、人数が増加するに伴いグループ数・遊びの種類が増加し、1つの遊びに対する継続時間は短くなったと言える。17:00以降では、退所時の混雑を避けるため、児童の管理のしやすさ、職員の仕事を並行して行えるようにするための合理化の工夫がなされていることが確認された。また、施設定員を上回ることで起こりうる事象は全体的に現れておらず、来所時間のずれと晴天日特有の屋外遊びが行われることで、空間的な定員を上回る状況が回避されているうに、プログラム展開時における職員の2室3

領域の空間構成を利用した逃げ場確保の工夫により、円滑に進行できていることが理由であるとわかる。つまり晴天日放課後の終日保育においては施設定員を上回る28名の集団規模においても十分に対応できていると言える。

#### 謝辞

本研究を遂行するに当たり、下関市社会福祉協議会菊川支所、「つばめの家」施設長・職員及び児童保護者の方々の御理解と調査への全面的な協力を頂いた。末尾ながら記して謝意を表します。

#### 参考文献

- 1) 斎尾直子・長谷夏哉:都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心-豊かな空間確保両立についての考察,日本建築学会計画系論文集, No.614,pp,33-39,2007,4
- 2) 宮本文人・岩淵千恵子:学童保育施設における活動機能と平面構成,日本建築学会計画系論文集, No.618,pp,25-31,2007,8
- 3) 清水肇・小野尋子:学童保育施設の生活空間構成の実態,日本建築学会計画系論文集, No.668,pp,1799-1806,2011,10
- 4) 塚田由佳里・小伊藤亜希子:施設空間と保育方法からみた学童保育所の分割方法とその効果,日本建築学会技術報告集,第27号,pp,223-228,2008,6
- 5) 松本歩子・山根さおり・関川千尋:近年の学童保育所のあり方に関する研究,日本建築学会計画系論文集, No.630, pp.1683-1690,2008.8
- 6) 三宅勝司・高橋博久:民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究,日本建築士学会大会学術講演梗概集,E-1分冊,pp,59-60,1997,9
- 7) 江川紀美子・定行まり子:東京都心部の子育て関連施設の整備と計画に関する研究,日本建築学会大会学術講演梗概集,E-1分冊,pp.17-18,2009.8
- 8) 中園真人・大和聡羅他3名:学童保育施設における平日放課後の集団規模と使われ方の関係,日本建築学会計画系論文集, No.723, pp.1207-1215,2016,5

\*\* 山口大学大学院理工学研究科 修士課程

\*\* 山口大学大学院理工学研究科 修士課程

\*\*\* 山口大学大学院理工学研究科 助教・博士(工学)

\*\*\*\* 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

\*\* Under Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

\*\* Under Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

\*\*\* Assistant Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng

\*\*\*\* Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng